



かんせいちゅうがっこう

寛政中学校だより

だい 11 号
第11号

れい わ ねん がつ にち かんせいちゅうがっこう
令和8年 3月25日 寛政中学校

そつぎょうせい いのち つか かた かんが ひ だい かいそつぎょうしょうしゅうじゅしき こうちゅうしきじ こうちゅう なかわらまさかず
卒業生へ 『命の使い方を考える日』-第64回卒業証書授与式の校長式辞より- 校長 中村雅一

みねんかん がっこうせいかつ おの あら みち あゆ だ そつぎょうせい わたし じぶん いのち
三年間の学校生活を終え、新たな道へと歩み出す卒業生に、私は「自分の命をどう生きるのか」という問い
について考えてほしいと願ひ、東日本大震災の中で母と妹を救った一人の少年の話を紹介しました。こ
こでは、その式辞の一部を紹介します。

◇ 仲間と過ごした三年間

そつぎょうせい みな かんせいちゅうがっこう みねんかん じかん
卒業生の皆さん。寛政中学校での三年間は、どのような時間でしたか。
ひ び じゅぎょう きょうじ いいかいがくつどう ぶかつどう とも なにげ かいわ せんせい
日々の授業。行事。委員会活動。部活動。友だちとの何気ない会話。先生とのやりとり。
ふりかえれば、たくさんの場面が思い出されることでしょう。

この一年、私は何度も皆さんの姿に心を動かされました。体育祭、文化祭、球技大会、生徒会行事。

そこには、仲間と拍手を送り、応援し合う姿がありました。

だれ どりよく こころ おうえん すがた がっこう あたた ぐうき
誰かの努力を心から応援する、その姿が、学校の温かい空気をつくっていました。

◇ 3月11日という日

きょう なかま わか ひ そつぎょうしき にちじょう すこ はな ひにちじょう とくべつ じかん
今日は仲間との別れの日です。卒業式は、日常から少し離れた「非日常」の特別な時間でもあります。
2011ねん 3がつ にち ひがしにほんだいしんきい お
2011年3月11日。東日本大震災が起きました。

じしん つなみ おお とうと いのち く うば いま にせん にん こ かたがた ゆくえふめい
地震と津波によって多くの尊い命と暮らしが奪われ、今なお二千人を超える方々が行方不明のままです。

◇ 一人の少年の行動

ひ とうほく まち じゅうごさい しょうねん しゅうい ふりよう よ しょうねん
あの日、東北のある町に十五歳の少年がいました。周囲からは「不良」と呼ばれていた少年でした。

つなみ せま なか かれ ははおや たかだい ひなん いもうと しょうがっこう お
津波が迫る中、彼は母親を高台へ避難させ、妹のいる小学校へ向かいます。

たいいくかん な いもうと せ おお たか つなみ なか ひつし すす こうしゃみかい か あ いもうと たす
体育館で泣いていた妹を背負い、胸の高さまで迫る津波の中を必死で進み、校舎三階へ駆け上がって妹を助
けました。その途中、人々が津波に呑み込まれていく、恐ろしい光景を彼は目の当たりにします。

その夜、彼は暗闇の中へ向かいました。行方不明の親戚や友人を探すためでした。

なに かれ しょうどう つ うご
何が、彼をその行動へと突き動かしたのでしょうか。

◇ 命をどう生きるか

いのち あ まえ つづ のこ いのち つか せきにん つか ちから
命は、当たり前前に続くものではありません。しかし、残された命には、「使う責任」と「使う力」がありま
す。人は誰でも、「変りたいのに変れない」という葛藤を抱えています。

しかし、辛い経験や挫折が、自分の生き方を問い直させることがあります。

それは、「自分の命をどう生きるのか」という問いです。

いのち たいせつ い つづ
命を大切にすることは、ただ生き続けることではありません。

あた じかん どう つか だれ つか かんが いのち たいせつ
与えられた時間をどう使うか。誰のために使うか。それを考えることが、命を大切にすることです。

◇ 挫折は新しい一歩

これから皆さんの前には、迷いや悩み、遠回りもあるでしょう。挫折も、きっとあると思います。

しかし、挫折は終わりではありません。挫折は「もう一度、命の使い方を考えなさい」という問いかけです。

そこから、人は変わります。だから、勇気を失わないでください。希望を捨てないでください。希望は待ってい

でも生まれません。学び続ける中で、内側から育っていくものだからです。

◇ 学び続けるということ

最後に伝えたいことがあります。

「学ぶ」とは、知識を増やすことだけではありません。昨日までの自分と違う自分になることです。

一言で言えば「別人になること」です。

考え方が変わる。感じ方が変わる。行動が変わる。その積み重ねが、人を成長させます。

命は一度きりですが、生き方は何度でも変えられます。

◇ 卒業生への願い

私は長い年月、教員として歩み、挫折を乗り越えて成長する多くの教え子たちを見てきました。

人は、学び続ける限り、何度でも変わることができます。

どうか自分を信じ、学ぶことをやめないでください。

皆さん一人一人の未来が、勇気と希望、そして出会いに満ちたものであることを心から願っています。

卒業、おめでとう。

1, 2年生へ『大きな石』 -修了式・退任のあいさつより-

修了式では、校長退任のあいさつも兼ねて、ある大学教授が学生に語った「大きな石」の話を紹介しました。そのお話に少し加筆して、お別れとお礼のあいさつにさせていただきます。

今日で今年度が終わります。

そして、私にとっても、この寛政中学校で皆さんと過ごす最後の修了式になります。

1 大きな石の話

ここに「大きな壺」に見立てた器があります。そして、大きな石と、たくさんの小さな石があります。

この壺に、まず小さな石だけを入れていきます。(大きな石は、そのまま置いておきます)

さて、皆さん。この壺は満杯でしょうか。

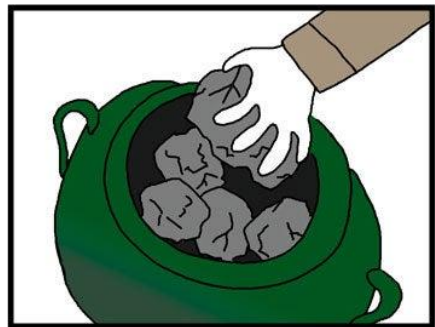
「満杯ですか？」本当に満杯でしょうか。(砂利を取り出し、器を揺らすと、小さな石の間に砂利が入りました。壺の中に流し込む)

では、もう一度聞きます。

この壺は満杯でしょうか。(砂を取り出し、隙間に流し込む)

まだ満杯ではありませんね。(最後に水を注ぐ)

水も入りました。



さて、この話で、校長は何を伝えたいのでしょうか。ポイントは、壺をいっぱいにするものではありません。

「大きな石を先に入れること」です。

このたとえが教えてくれることは、大きな石を先に入れない限り、それが入る余地は二度とないということです。

ここでいう「大きな石」とは、君たちにとって一番大切なものです。

家族かもしれない。夢や目標かもしれない。勉強、部活動、友だちかもしれません。人それぞれ違います。

しかし、それを最初に入れないと、人は知らないうちに、本当に大切なものに使う時間を失ってしまうのです。

2 石が入らないとき

もちろん、人生には、壺に入らないほど大きな石もあります。追い求めても叶わない夢もあるでしょう。

しかし、そこで終わりではありません。石を砕いて小さくする。つまり、やり方を変えるという方法があります。

あるいは、自分自身の器を大きくするという方法もあります。

努力して、学んで、成長していくことで、今は入らない石が、いつか入るようになるかもしれません。

どうか、これからの人生で、ぜひ自分にとっての「大きな石」を大切にしてください。また、見つけてほしいと思います。

3 人生のコンパス

これから皆さんが生きていく社会は、大きく、そして速く変化していきます。

何が正しいのか、どこへ進めばよいのか、迷うこともあるでしょう。

そんなときに役に立つのが、自分の進む方向を示す「コンパス（方位磁石）」です。

そのコンパスをつくるのは、問い続ける力です。

常識や多数意見に流されるのではなく、「なぜだろう」と考えること。そして、学び続けること。

それが、自分の進む道を見つめる力になります。



4 命とは時間

もう一つ、大切なことを伝えます。命を大切にすることは、時間を大切にすることです。

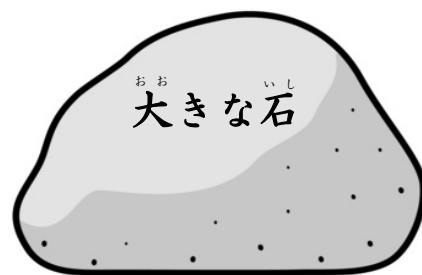
命とは、人が持っている時間そのものだからです。焦る必要はありません。急ぐ必要もありません。

しかし、自分の時間をどう使うかは、とても大切です。

その時間を自分のためだけでなく、誰かの幸せのため、社会のためにも使う

そこに、人の本当の幸福があるのではないのでしょうか。

「使命」という言葉は、命を使うと書きます。



5 最後に

私は、43年間、教師として子どもたちと向き合ってきました。その中で強く感じていることがあります。

それは、人の人生をつくるのは、才能ではなく、「何を大切に生きていくのか」という選択だ、ということです。

どうか皆さんも、自分にとっての「大きな石」は何かを問いながら、自分の命の時間を大切に使ってください。

私は、この寛政中学校で、皆さんの成長する姿から、私自身もたくさんのことを学ばせてもらいました。

本当にありがとうございました。皆さんの未来を、心から応援しています。

もしこれからの人生で迷うことがあったら、今日の話をほんの少し思い出してください。

「自分の壺に入れる、大きな石は何だろう。」、その問いを忘れなければ、人は前に進むことができます。

それでは、生徒の皆さん。

ありがとう。元気でね。さようなら。

追伸

余談になりますが、少し古い映画に「ディープ・インパクト」という作品があります。映画の終盤、地球最期の日に、人々が「本当に大切なもの」に気づき、それを抱きしめながら最後の時を迎える場面が描かれています。

人は、最後の最後になって、ようやく「大きな石」に気づくことがあります。できることならば、それを失う前に気づきたいものです。

この学校ですが、校長として皆さんにお届けする最後の文章になりました。

寛政中学校で過ごした日々は、私にとってかけがえのない時間でした。

生徒の皆さん、保護者・地域の皆様、そして、教職員の皆さんに、心より感謝申し上げます。

だい かいそつぎょうしき 第64回卒業式

3月11日(水)、第64回卒業式が行われ、3年生69名が寛政中学校を巣立っていきました。前日に1・2年生を中心に会場の準備や教室の飾りつけを行い、卒業生をお祝いする雰囲気を作りました。卒業生を送ることばを2年生の松浦 悠希さんが読み、卒業生への感謝の思いを伝えました。

卒業生たちは堂々と卒業証書を受け取り、合唱「友」「旅立ちの日に」を披露して、保護者や在校生に立派な姿を見せました。

そつぎょうせい わか ことば 卒業生の別れの言葉

そつぎょうせいだひょう おか ゆうな さん
卒業生代表 岡 優奈さん

(紙面の都合上、抜粋して掲載します。)

私たちに訪れた最後の寛政祭。3部制という新しい形での挑戦でした。学年全体で取り組む中で、意見がまとまらなかったり、思うように進まなかったりすることもありました。本番が近づくにつれてダンスを教えあったり、小道具を分担して作ったりすることで、私たちは一つのチームになっていきました。そして迎えた本番。会場が揺れるほどの盛り上がりの中、私たちは3年間の全てを出し切りました。あの瞬間は間違いなく私たちの集大成だったと思います。



時にはぶつかり合いながらも、私たちは困難を乗り越えるたびに絆を深めてきました。

そんな、素晴らしい思い出ができたのも、私達を見守ってくださった皆様がいてくださったからこそです。1番身近なところで支えてくれた保護者の皆様。テスト前や学校行事の前、不安になって「できない」や「もう無理」と弱音を吐いてしまうことがありました。そんな時、いつも「大丈夫」、「あなたならできる」と励ましてくれました。思春期で反抗的な態度を取った私達を変わず見守り、支えてくれました。皆さまの愛情があったからこそ、私たちは今日という卒業の日を迎えることができました。本当にありがとうございました。

最後に、3年生の皆。3年間、本当にありがとうございました。楽しい時も悔しい時もいつもみんなと一緒にでした。当たり前前に過ごしていた何気ない毎日が特別な時間だったのだと、今、強く感じています。笑い合った日々、真剣にぶつかり合った日々、そのすべてが大切な思い出です。離れていても、この3年間でできた絆はずっと変わりません。これから先も、それぞれの場所でがんばる仲間がいることを忘れずにいましょう。

ねんせい おく かい 3年生を送る会



3月10日(火)の1、2校時に3年生を送る会を行いました。

まずは音楽部のオープニング演奏と各部活動から、3年生の卒業を祝うビデオレターを放映しました。演技や映像に工夫をこらした個性あふれる映像を、3年生も在校生も楽しそうに見ていました。

1年生は音楽に合わせたあたたかなビデオメッセージから、合唱曲「大切なもの」を歌いました。1年生の素直な思いを伝える優しい発表となりました。

2年生は学年全員でポンポンを使ったダンスと「3月9日」を合唱しました。来年度の寛政中をリードする存在として、堂々とした姿を見せてくれました。

3年生からは、次の世代にバトンを渡すような、元気あふれる歌と劇を披露しました。寛中生らしく力強く羽ばたいていく姿をみることができました。

1、2年生からのメッセージカードの贈呈や校長先生への卒業式サプライズもあり、笑顔あふれる三送会となりました。

ぼうさいがくしゅう 防災学習

1年生は消火器の使い方や心肺蘇生法の学習、2年生は仮設トイレの設置や防災備蓄庫の見学、3年生はDIG訓練(災害図上訓練)を行いました。また、全学年でHUG(避難所運営ゲーム)を行い、被災時に避難所運営をすることの大変さを体感しました。

